私がシュターツオーパーの一員となってから、既に四半世紀が経ちました。その豊かな伝統に関心を抱いていることを誇りに思うと同時に、私の仕事が将来に向け、なんらかの可能性を開くのに役立つことを望んでおります。そして私たちのシュターツオーパー・ウンター・デン・リンデンが、これからもほんとうに長い生命を持ち続けることを願っております。

二〇一七年夏

ダニエル・バレンボイム

目次

本書に寄せて　ダニエル・バレンボイム　3

序奏　ドイツのオペラハウスとドイツの世紀　13

第1章　シュターツオーパー――革命の展示窓　23
シュトラウスとホーエンツォレルン家／「革命！　休演！」／劇場共和国の陣痛／妬み深い民主主義者

第2章　共和主義の歌劇場　53
マックス・フォン・シリングス／赤い下院と赤いオペラハウス／悪性インフレ／大衆のための歌劇場／シリングス時代の終焉

第3章　ワイマール共和国の実験歌劇場　83
ヴォツェックと現代人／魅惑と挑発／シャルロッテンブルクの興隆／ハインツ・ティーティエンと歌劇場の「労働共同体」／クロルオーパーの不可思議／「ベルリンには、いったいいくつオペラハウスがあるといいのか？」

第4章　足並みを揃えた歌劇場　135
物騒で密接な関係／ゲーリングの庇護のもとで／政治と現実政策／ヒトラーの聖堂――ティーティエンの幸運

第5章　ウンター・デン・リンデンのマクシミリアン・サーカス　175
灰色の猊下／「私のシュターツカペレは気に入りましたか?」／「カラヤンの奇蹟」

第6章　シュターツオーパー　表看板と生き残りの狭間で　211
ゲーリング対ゲッベルス／日和見主義と日和見主義者／「統制」――いったいどこまで?／表看板としてのシュターツオーパー／一九四一年から四二年にかけての復活／戦争がベルリンへ／ベルリンのヴォルフガング・ワーグナー／『神々の黄昏』への前奏曲

第7章　戦後ベルリンの歌劇場　275
目新しい演奏会場と昔馴染みの顔触れ／非ナチ化――ソヴィエト化／アドミラルパラストのパルム、レガール、ドイツ・シュターツオーパー／「若々しい才能――昔ながらの精神」／ドイツ社会主義統一党の誕生／ベルリン封鎖とブレッヒの復帰

第8章　分断都市の国民歌劇場　335
クライバーとクノーベルスドルフ／前線で／「ルクルス事件」／自由、団結、一時代の終焉／レガールの後任／アポロとミューズに

第9章　鉄のカーテンの背後で　399
壁／「すべての音楽劇場の母」／「原理の問題について」／東と西／ハンス・ピシュナー時代の拡充と論争／輸出と亡命／変化のきざし

終　曲　政治的転換期のシュターツオーパー　483
バイロイトへの憧れ／タンゴはバレンボイムと／シュターツオーパー・ウンター・デン・リンデンの新時代

時代を刻む《シュターツオーパー》　517

謝　辞　524
訳者あとがき　525
原註　529
参考文献　565
人名索引　573

歌劇場の用語　8
本書関連地図　10
本書写真出典　12
本書関連年表　557
シュターツオーパー20世紀以降の支配人と音楽総監督　554